

長患いの病人一人のことで相談しあつた。米軍は病人は一切通過禁止で無理に通ると全員も犠牲になり居住地に戻されるという。その家族は涙ながらに納得してくれた。そしてその病人の自らの命を断ち穴に納めたとき、その家族はもとより周囲ももらい泣きしたことが、いまでも目に浮かぶ。

翌日、全員検問所を通り、伝染病の予防注射も無事終り、証明書を受給。無事京城府外の駅に下車、市内の日本人会のあたにかい歓待を受けた。私たちは運よくその日のうちに釜山埠頭行きの列車に乗り込むことができ、更に米軍の好意で一日早く釜山港を出帆することができたのである。

## 私の戦争体験記

大分県 阿部 強

昭和二十年八月十日、ソ連の艦砲射撃が始まる。全員避難せよ、との命令で工場（朝鮮鉄道清津工場）勤

務の私は書類の片づけをし、全員一度家に帰り、身のまわりのものをまとめた。

家の者は、早朝に避難したのであろう。家の中はそのまま、で、誰もいない。妻と娘二人は、官舎の人達と一緒に行動をとつたであろうと思つた。とりあえず、食糧をと、非常食の中から缶詰の大きなのとそのほか少々の物を持って駅へと急いだ。ところがどうでしょう。駅には人一人いない。約束の時間にまだ五分ある。しかし、汽車は出た後なのだ。

引率する私をほったらかして汽車は出ていたのだ。どうしたものかと突つ立っていたら、北のほうからポーン、ポーンと汽笛の音が聞こえてくる。まだ遠くには行っていない様子だが、後を追つて走るのはとてもではない。

汽車は山ぞいをまわっているから、直線で羅南駅に行こうと考え、海岸線に沿つて走つた。砂地で、三菱製錬所がある所で、B 29 が落下傘をつけた爆弾を何個も落とした所だ。

砂地をとにかく必死で一人で走りつづけた。どのく

らい走ったか、やっと羅南駅に着いたら、近くのほうでポー、ポーと汽笛が聞こえる。安心して駅の中に入った。あらゆる物が散らばっている日用品から反物まで、驚きだった。人一人いない。

あとで聞いた話だが途中何度もおそれ、前進することができなかつたという。それで山の中に逃げて行った人達が大勢いた。その人達はどうかやって南下したのだろうか。今にいたるも、あの人達のこととはわからない。

清津は、満州の玄関と云われた所で、製錬所、灯台、大きな石油タンクのあつた町。石油タンクが爆破された頃から、日本はもうだめだ、兵隊はもう引揚げている。あとは我々が守るほかない。という声は聞こえていたが、ほんとうだった。やつとの思いで皆さんと一緒にの汽車に乗ることができ、一途に南下。家族とは別々になったが、運にまかせて元山に着いた。

ソ連兵が歩いてきた。朝鮮人が強くなった。

八月十五日、戦争は終つたという。ニュースで聞いた。日本へ引き揚げだ、清津に帰るところではない。

着のみのままである。とにかく皆さんを無事に日本に帰らせたいと考えた。さあ、食糧の心配、現地人の所に行き、ジャガイモを何袋か買ってくるのができた。鉄かぶとで煮た。そして、京城へと向かつた。京城の官舎で、家族と会うことができた。ひとまず安心したが、私の任務があるので、すぐに釜山へと向かうことになった。釜山の埠頭には、人々々でこつた返し、身動きもできない。大きな荷物を背中に、その上に子供をのせ、両手に荷物と子供の手、ひもじそうに泣く子供の声、ここまできたのに荷物をほうりなげ、海にすてる人、異様な目つきの人びと……。なんとかならないものかと同僚の三浦さんと詰所に行った。詰所の人は、命令がないので勝手なことではできないと言う。何を言つてるか、戦争は終つたのだぞ、負けたのだぞと争っている所に、昔憲兵時代の部下であつた方が来て、あつ三浦さんと声をかけてきた。なんとかしましように、とオニギリをどつさり持つてきてくれた。そのときの嬉しそうな顔、何度もありがとうと言われた。私たちの乗船の番がきた。私は若い者達と門司まで同

行した後、引返し、釜山に帰るつもりであった。

しかし、もう日本人は朝鮮には行けない。釜山には行けない。とにかく落ちつき先で待機していてくれとのことで、仕方なく幸崎の里に帰ることにした。一週間以上たったが、なんの音沙汰もないので大分に問合せに出た帰りに、力なく歩いている私に「皆さんお帰りでご安心です」と言う挨拶に、なんのことやらと考えながら家に着くと、妻と娘二人いるではないか。おどろきと、安心と、力がぬけたようであった。さあ、これからの生活、何一つ無い。無から始まる。

関東大震災の年に朝鮮に渡り、南鮮からシベリアに、又京城から北鮮清津にと二十七、八年間外地生活で、あちらで骨を埋めるつもりで生きてきたのだ。先ず住む所を決めねばならない。親族で一人暮らしをしているお婆あさんの所に行くことにした。何年か前に大水害があったそうで、壁は落ち、竹組みだけが残って、ニワトリ小屋のようだった。

食糧は自作せねばならない。桑畑を開墾し、芋を植え、田仕事には、加勢に行くなど、なれない仕事に精

を出した。

それから私は、別府の進駐軍の中で大工の仕事にすることができた。朝は暗いうちに家を出、又暗くなつてから帰るといふ毎日、定年まで働いた。一生懸命だった。

## 一心同体の再出発

神奈川県 山岸 美恵子

私達一家は、韓国のソウルから引揚げて来ました。

父は朝鮮総督府に奉職しておりましたので、転勤で、平和な生活の中にも何かと忙しいようでした。

私は大正十五年一月、京城で生まれました。そして父の転勤で当然のことですが、朝鮮の各地での生活を味わいました。

女学校時代、三回も転校しました。咸鏡北道清津府、慶尚北道大邱府、最後は京城府でここで府立第一高等女学校を卒業しました。